



Title	自己定義の類似性と自他の相対的遂行度が友人選択と親密性に及ぼす影響
Author(s)	石田, 靖彦
Citation	対人社会心理学研究. 2006, 6, p. 65-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9575
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自己定義の類似性と自他の相対的遂行度が友人選択と親密性に及ぼす影響¹⁾

石田靖彦(愛知教育大学教育学部)

本研究では、自己定義の類似性と自他の相対的な遂行度が友人選択と親密性に及ぼす影響について検討した。大学生 221 名(男性 84 名、女性 137 名)を対象として、自己の諸側面に関する重要度(関与度)と遂行度を、自己、友人、一般的な他者について評定させた。さらに友人に対する親密性を測定した。その結果、自己と友人は自己の諸側面の重要度(関与度)という自己定義において類似していることが示された。遂行度については低関与領域では友人が自己よりも優れ、高関与領域でも友人は自己と同等かやや優れていることが示された。親密性については、関与度の類似性が高いほど親密性は高いこと、また男性では関与度と相対的遂行度の交互作用効果が認められ、高関与領域において友人の関与度も高い場合は友人の遂行度が高いほど親密性は上昇するのに対し、友人の関与度が低い場合には友人の遂行度が高いほど親密性は低下することが示された。

キーワード: 自己定義の類似性、自他の相対的遂行度、友人選択、親密性

問 題

友人選択に関わる要因については、物理的な近接性、身体的魅力や態度の類似性などさまざまな要因が指摘されてきた。なかでも価値観や態度の類似性は対人魅力に関する重要な規定因であることが明らかにされている。人は世界を論理的で斉合的で正確に意味づけたいという動機を有しており、他者との類似性に基づく合意的妥当化は、この動機に対する報酬となるからである(Byrne, 1971)。

他方、Tesser, Campbell, & Smith(1984)は、自己評価を維持・高揚しようとする動機に着目し、自己評価維持という観点から友人関係に関する研究を行っている。人は自己評価を維持・高揚しようという動機を有しており、この動機を満たす相手を積極的に選択していると考えられる。彼らは、小学生の友人関係について検討し、自分にとって重要度(関与度)の高い領域では自分が友人よりも優れており、重要度(関与度)の低い領域では友人の方が優れていることを明らかにした。この結果は、自己評価を維持・高揚できるような友人を積極的に選択していることを示している。

ただし、Tesser, et al.(1984)の自己評価維持に基づく予測については一部に支持しない結果も報告されている。磯崎(1994a)は、自己評価維持に関する論文を概観し、自己評価維持に基づく予測は男子にくらべて女子ではあてはまりが悪いこと、また発達的には中学生は小学生にくらべて自分にとって重要な領域でも相手を高く評価していることを指摘している。このことから、友人のもつ意味や機能が性別や発達段階によって異なることが示唆される。

いうまでもなく青年期は自己の確立の時期であり、自己の確立にはお互いの価値観や考え方が類似した親密な

友人関係が必要である。たとえば Suls & Mullen(1982)は、社会的比較に基づく自己概念の形成効果について検討し、類似した他者との比較は青年期に顕著であることを指摘している。なかでも自己にとって重要な領域での類似性は、青年期の自己形成にとって重要な意味をもつと考えられる。

一方、高田(1999a, b)は、大学生の社会的比較の様相について検討し、社会的比較には自己を定位させる機能だけでなく、自他の比較を通じて自己評価を維持・高揚させたり、逆に優れた他者に近づくことによって自己向上を図ろうとする機能もあることを指摘している。つまり、青年期の友人関係には自他の類似性を確認することによって自己の確立を促進する側面だけでなく、自分よりも優れた他者との融合を通じて自己を高めていこうとする側面もあると考えられる。

そこで本研究では大学生の友人関係を取り上げ、友人との自己定義の類似性と自他の相対的遂行度について検討する。具体的には、自己に関わるさまざまな活動や能力、特徴について、それらをどの程度重要だと感じているかという重要度(関与度)を測定し、これを“自己を自己たらしめている特徴”として自己定義の指標とする。そしてこの自己定義において、自己、友人、一般的な他者がどの程度類似しているかを明らかにする。さらに自己に関わるさまざまな活動や能力、特徴について、自己、友人、一般的な他者の遂行度を測定し、遂行度においてどのような友人が選択されているかを明らかにする。以上が本研究の第 1 の目的である。

本研究の第 2 の目的は、友人に対する親密性についても自己定義の類似性と相対的遂行度という 2 つの観点から検討することである。先述したように、他者との類似性に基づく合意的妥当化は他者に対する親密性を増大さ

せると考えられる。しかもその効果は自分にとって重要な領域であるほど顕著に認められると予測される。

友人の遂行度が親密性に及ぼす影響については、3つの異なる予測が成り立つ。第1は Tesser, et al.(1984)の自己評価維持に基づくものである。これまでの研究では、自分にとって重要度の高い領域において自己よりも相手の遂行度が高い場合には、自己評価が脅威にさらされるため、相手との心理的距離を増大させることが明らかにされている(Pleban & Tesser, 1981)。したがってこの考えに基づけば、自分にとって重要な領域で相手が優れているほど相手に対する親密性は低下し、逆に自分が優れているほど親密性は上昇すると予測される。

第2の考えは第1の予測とは反対に、友人の遂行度の高さが友人に対する親密性を上昇させるというものである。先述したように、青年期の友人関係には社会比較を通じて自己評価を維持・高揚する側面だけでなく、逆に優れた他者と一体化することによって自己評価を高めようとする側面もあると考えられる。したがってこの考えに従えば、友人の遂行度が高いほどその友人に対する親密性は上昇し、その効果は自分にとって重要な領域ほど顕著に認められると予測される。

第3の考えは、Tesser, et al.(1984)の自己評価維持に関するモデルに相手の視点も導入したものである(Beach & Tesser, 1995)。Tesser, et al.(1984)のオリジナルのモデルでは、重要な領域で相手を上回ることが自己評価を高めると考えられてきた。しかし、相手を上回って自己評価を維持・高揚することは、相手の自己評価を低下させる可能性がある。とくにその領域が相手にとっても重要である場合には相手の自己評価は大きく低下すると考えられる。つまり、相手の自己評価も考慮するならば、自分にとって重要な領域で相手を上回る場合には、相手はその領域をそれほど重要とは思っていない方が望ましい。したがってこの考えに基づけば、自分にとって重要な領域で相手を上回することは相手に対する親密性を上昇させるが、その効果は相手もその領域を重要と感じている場合には半減すると予測される。

方 法

調査対象及び調査時期

国立大学に所属する1から4年生の大学生を対象として、以下の質問紙を集団場面で実施した。回答に不備のあるものを除外して、最終的に221名(男性84名、女性137名)を分析対象とした。調査時期は2004年11月中旬～12月初旬であった。

質問紙の構成

質問紙は、(1)自己定義に関連した活動や能力、特徴に関する自由記述、(2)各活動や能力、特徴における自己、

友人、一般的な大学生の関与度と遂行度の評定、(3)友人に対する親密性評定、という3つの内容で構成された。

(1)自己定義に関連した諸側面の自由記述 “同年代の一般的な大学生にとって重要であったり、できると自慢になるような活動や能力、特徴”を思い浮かばせ、それらを6つを限度に自由記述させた。

(2)諸側面における関与度と遂行度の評定 (1)で挙げられた6つの諸側面について、自己、友人、一般的な大学生の関与度と遂行度をそれぞれ評定させた。自己の関与度については、「自分にとってどのくらい重要か」という問いに対し、「非常に重要である<10>」から「まったく重要でない<1>」の10段階で評定させた。さらに関与度が最も高い項目と最も低い項目をそれぞれ1つ選択させて「高関与領域」「低関与領域」とした。遂行度については、「自分はどのくらいできているか」という問いに対し「非常によくできている<10>」から「まったくできていない<1>」の10段階で評定させた。

友人の関与度と遂行度は、「よく一緒にいる同性友人(以下、友人と略す)」を1名想起させ、その友人の関与度と遂行度を推測して10段階で評定させた。「一般的な大学生」の関与度と遂行度についても、同様に10段階で推測して評定させた。

(3)友人に対する親密性評定 (2)で想起された「よく一緒にいる友人」に対する親密性を測定した。測定項目は、林(1978)や井上・小林(1985)の項目を参考にして、“一緒にいて楽しい”、“尊敬できる”、“考え方に共感できる”、“好感をもてる”、“頼りにできる”、“気が合う”、“親しみを感じる”の7項目を用い、「まったくあてはまらない<1>」から「非常によくあてはまる<7>」の7段階で評定させた。

結 果

自己定義に関連する諸側面の分類

まず自己の諸側面に関する自由記述について、山本・松井・山成(1982)の研究を参考にして内容分析を行った。その結果、外面的側面に関するものとして「容貌(かっこいい・かわいいこと、スタイルがいいこと、おしゃれであること等)」「所有(お金があること、車やブランド品を持っていること等)」、能力的側面に関するものとして「知性(頭がよいこと、勉強がよくできること等)」「特技(英語が話せること、料理ができること、スポーツが得意であること等)」、内面的側面として「性格(おもしろいこと、思いやりがあること、協調性があること等)」「生き方・価値観(夢をもっていること、自分の意見をもっていること、信念があること等)」、また山本らの分類にはないが、人間関係に関するものとして「友人関係(友だちがたくさんいること等)」「恋愛関係(恋人がいること、恋人と仲良くすること等)」、日常の活動に関するものとして「クラブ・サークル活動(部活で活躍すること、

Table1 高関与領域、低関与領域における各カテゴリの選択数と選択率

	高関与領域			低関与領域		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
<外面的側面>						
容貌	2 (2.4%)	5 (3.6%)	7 (3.2%)	12 (14.3%)	17 (12.4%)	29 (13.1%)
所有	9 (10.7%)	3 (2.2%)	12 (5.4%)	12 (14.3%)	25 (18.2%)	37 (16.7%)
<能力的側面>						
知性	6 (7.1%)	4 (2.9%)	10 (4.5%)	13 (15.5%)	11 (8.0%)	24 (10.9%)
特技	14 (16.7%)	15 (10.9%)	29 (13.1%)	19 (22.6%)	34 (24.8%)	53 (24.0%)
<内面的側面>						
性格	10 (11.9%)	18 (13.1%)	28 (12.7%)	3 (3.6%)	9 (6.6%)	12 (5.4%)
生き方・価値観	10 (11.9%)	27 (19.7%)	37 (16.7%)	4 (4.8%)	3 (2.2%)	7 (3.2%)
<人間関係>						
友人関係	7 (8.3%)	29 (21.2%)	36 (16.3%)	5 (6.0%)	6 (4.4%)	11 (5.0%)
恋愛関係	9 (10.7%)	7 (5.1%)	16 (7.2%)	3 (3.6%)	10 (7.3%)	13 (5.9%)
<諸活動>						
クラブ・サークル活動	4 (4.8%)	4 (2.9%)	8 (3.6%)	4 (4.8%)	11 (8.0%)	15 (6.8%)
就職活動	5 (6.0%)	7 (5.1%)	12 (5.4%)	0 (0.0%)	3 (2.2%)	3 (1.4%)
その他	8 (9.5%)	18 (13.1%)	26 (11.8%)	9 (10.7%)	8 (5.8%)	17 (7.7%)
合計	84 (100.0%)	137 (100.0%)	221 (100.0%)	84 (100.0%)	137 (100.0%)	221 (100.0%)

部活でがんばること等)」「就職活動(就職できること、資格試験に受かること等)」に分類し得ることが示された。

次にそれぞれの被験者が、もっとも重要度の高いとして挙げた項目(高関与領域)、もっとも重要度の低いとして挙げた項目(低関与領域)を、先述したカテゴリに基づいて分類した。結果を Table1 に示す。

全体的な傾向として、高関与領域では「生き方・価値観」「友人関係」「特技」「性格」を挙げる者が多く、低関与領域では「特技」「所有」「容貌」「知性」が多いが、かなりのばらつきのあることも見て取れる。山本ら(1982)は自己評価に関連が強い側面として、“優しさ”“容貌”“生き方”を挙げ、性差に関して男性は“知性”の重要度が高く、女性は“優しさ”や“家の経済力”が高いことを報告している。山本らの研究と本研究では測定方法が異なるために単純な比較はできないが、本研究の被験者の場合、「容貌」や「知性」を重要と感じる者は相対的に少ないと言える。

自己・友人・他人間の関与度と遂行度の比較

次に、自己、友人、他人の関与度および遂行度を、領域(高関与領域・低関与領域)×対象(自己・友人・他人)の分散分析により比較した。男女別の関与度は Table2 に、遂行度は Table3 に示した。

関与度 男性では、領域の主効果($F(1, 83) = 103.97, p < .001$)、領域×対象の交互作用($F(2, 166) = 40.64, p < .001$)が有意となった。交互作用の下位検定(HSD 検定)の結果、高関与領域では自己の関与度が最も高く、次いで友人の関与度が高く他人の関与度は最も低いことが示された(友人・他人間のみ $p < .05$ でその他はすべて $p < .01$)。低関与領域では自己の関与度が最も低く、次いで友人の関与度が低く、他人の関与度は最も高いこと

が示された(友人・他人間のみ $p < .05$ でその他はすべて $p < .01$)。

女性では、領域の主効果($F(1, 139) = 349.5, p < .001$)、領域×対象の交互作用($F(2, 278) = 74.60, p < .001$)が認められた。交互作用の下位検定の結果、高関与度領域では自己の関与度が最も高く、次いで友人の関与度が高く、他人の関与度が最も低いことが示された(いずれも $p < .01$)。低関与領域では、自己の関与度が最も低く、次いで友人の関与度が低く、他人の関与度は最も高いことが示された(いずれも $p < .01$)。

Table2 高関与領域、低関与領域別の自己、友人、他人の関与度

	男 性			女 性		
	自己	友人	他人	自己	友人	他人
高関与領域	9.38 (0.13)	8.02 (0.22)	7.36 (0.22)	9.35 (0.10)	8.12 (0.17)	7.53 (0.17)
低関与領域	4.94 (0.22)	5.87 (0.27)	6.58 (0.23)	5.01 (0.17)	5.77 (0.21)	6.64 (0.18)

註：括弧内は標準偏差

遂行度 男性では、領域の主効果($F(1, 83) = 7.52, p < .01$)、対象の主効果($F(2, 166) = 4.87, p < .01$)、領域×対象の交互作用($F(2, 166) = 7.76, p < .001$)が有意となった。交互作用の下位検定の結果、低関与領域では自己の遂行度が友人および他人の遂行度に比べて有意に低いことが示された($ps < .01$)。高関与領域では自己、友人、他人の遂行度に有意差は認められなかった。

女性では、領域の主効果($F(1, 136) = 51.09, p$

< .001)、対象の主効果($F(2, 272) = 22.56, p < .001$)、領域×対象の交互作用($F(2, 272) = 15.67, p < .001$)が有意となった。交互作用の下位検定の結果、高関与領域では友人の遂行度が自己および他人の遂行度よりも有意に高く($ps < .01$)、低関与領域では自己の遂行度が友人および他人に比べて有意に低いことが示された($ps < .01$)。

Table3 高関与領域、低関与領域別の自己、友人、他人の遂行度

	男性			女性		
	自己	友人	他人	自己	友人	他人
高関与領域	5.93 (0.28)	6.29 (0.28)	5.55 (0.21)	6.37 (0.22)	7.20 (0.22)	6.21 (0.16)
低関与領域	4.29 (0.28)	5.52 (0.30)	5.77 (0.22)	4.32 (0.22)	5.79 (0.24)	6.01 (0.17)

註：括弧内は標準偏差

友人の関与度と自他の相対的遂行度が親密性に及ぼす影響

友人に対する親密性に関する7項目について、主因子法による因子分析を行ったところ、強い一因子性が確認された(固有値は、4.17, 0.93, 0.60...)。またすべての項目は第一因子に.60以上の負荷を有していたため、すべての項目の単純合計を項目数で除した値を算出し「友人に対する親密性」得点とした(得点範囲1~7; $\alpha = .87$)。自他の相対的遂行度については、友人の遂行度から自己の遂行度を引いた値を算出し、この得点を「自他の相対的遂行度」とした。

次に、友人の関与度と自他の相対的な遂行度が親密性に及ぼす影響を検討するために、友人に対する親密性を基準変数とする重回帰分析を行った。説明変数は、高関与領域、低関与領域のそれぞれにおける友人の関与度、自他の相対的遂行度、および友人の関与度と自他の相対的遂行度との交互作用項とした。結果を Table4 に示す。

男性では、高関与領域における友人の関与度の効果($\beta = .27, p < .05$)が有意となり、高関与領域での友人の関与度が高いほど友人に対する親密性は高くなることが示された。また高関与領域での友人の関与度と自己と友人の相対的遂行度の交互作用効果も有意となった($\beta = .37, p < .01$)。Figure1 は、この交互作用効果を Aiken & West(1991)に従って図示したものである。友人の関与度が高い場合は、友人の遂行度が高くなるにつれ、友人に対する親密性は上昇するのに対し、友人の関与度が低い場合には、友人の遂行度が高くなるにつれ親密性は低下することが見て取れる。一方、女性では、高関

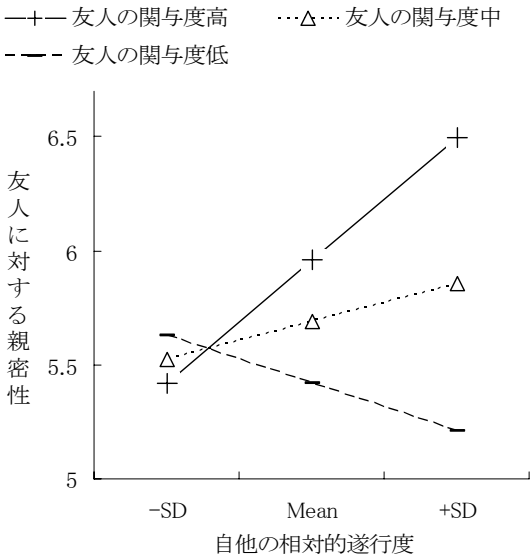
与領域における友人の関与度の効果が示されただけで($\beta = .21, p < .05$)、その他の効果は認められなかった。

Table4 友人の関与度と自他の相対的遂行度が親密性に及ぼす影響

	男性		女性	
	r	β	r	β
高関与領域				
1. 友人の関与度	.28 **	.27 *	.17 †	.21 *
2. 自他の相対的遂行度	-.04	.17	-.03	.00
3. 1×2の交互作用項		.37 **		-.09
低関与領域				
4. 友人の関与度	-.01	.04	.02	-.05
5. 自他の相対的遂行度	.02	.00	-.04	-.03
6. 4×5の交互作用項		-.01		.03
説明率	$R^2 = .21^{**}$		$R^2 = .04$	

註1: 自他の相対的遂行度 = 友人の遂行度 - 自己の遂行度

註2: ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$



註：自他の相対的遂行度は、友人の遂行度から自己の遂行度を引いたものである($M = .36, SD = 3.20$)。平均値がほぼ0であることから、右に行くほど自己の遂行度よりも友人の遂行度が高く、左に行くほど自己の遂行度が友人の遂行度よりも高いことを示す。

Figure1 高関与領域における友人の関与度と自他の相対的遂行度の交互作用効果(男性)

考察

自己定義の類似性と相対的遂行度が友人選択に及ぼす影響

本研究の目的は、自己定義の類似性と自他の相対的遂行度が友人選択や友人に対する親密性に及ぼす影響について検討することであった。自己定義に関連する活動や特徴は年齢が上がるにつれて多様化すると考えら

れるため、本研究では被験者自身が重要だと思う自己の諸側面を自由記述により収集し、それらの項目を用いて検討した。

諸活動に対する関与度について、自己、友人、一般的な他者間で比較した。その結果、友人の関与度は自分が重視する領域(高関与領域)では一般的な他者よりも有意に高く、自分が重視しない領域(低関与領域)では一般的な他者よりも有意に低く評定されていることが示された。遂行度については、自分にとって重要でない領域では男女とも自分よりも友人が優れていると認知していることが示された。しかし、自分にとって重要な領域では、男性は自分と友人を同程度と認知し、女性では自分よりも友人の方が優れていると認知していることが示された。この結果は、重要な領域では自分が友人よりも優れているという Tesser, et al.(1984)の予測とは異なっている。

このような結果については、本研究では評価基準がいまいであったことが関連しているかもしれない。自己評価維持機制は、学業成績など評価基準が明確なパフォーマンスの領域で認められるもので、性格や人間関係など客観的な評価がむずかしい領域では認められにくい可能性があるからである。ただしその一方で、評価基準が明確でなく客観的な評価が困難であるからこそ認知的な歪曲が行われやすく、自己評価維持による予測が支持されやすいとも考えられる。事実 Tesser, et al.(1984)は、学業成績だけでなく学校でのさまざまな活動において、認知的歪曲による自己評価維持機制を報告している。したがって、自己報告による本研究の結果は、自己評価維持とは異なる機制が関連していることを示唆している。

これまでの研究でも、女子は高関与領域でも自分と友人に差をつけなかったり、自己よりも友人の方が優れていると認知する傾向があること(磯崎・高橋, 1988; Tesser, et al., 1984)、また欧米人に比べて日本人では自己評価維持機制が働きにくく、発達的には中学生は小学生に比べて高関与領域でも友人を高く評価することが指摘されている(磯崎, 1994a, b)。磯崎(1994a)は、このような友人に対する高い評価について、自己評価を度外視した自己と友人との一体感や融合感が関連していると指摘している。日本人は欧米人に比べて自他が完全には分離しておらず、相互協調的な自己観が強い(遠藤, 1999; Markus & Kitayama, 1991)。また相互協調的な自己観は男性よりも女性で強く、中学生から大学生までの青年期に顕著に発達することが指摘されている(高田, 1999b)。これらの知見から考えると、児童期から青年期へと発達するにつれ、個を基本とした自己評価のあり方から自他の関係性を基本とした自己評価のあり方へと変化し、それにともなって友人選択も自分の自己評価を維持させる相手から、自分よりも優れた他者を選択し彼らと

の一体感や融合感によって自己評価を維持しようというように変化していくのかもしれない。本研究では、相互協調的自己観など個人差要因は測定していない。今後はこれらとの関係を、発達的な視点を踏まえて検討していく必要があるだろう。

自己定義の類似性と相対的遂行度が友人に対する親密性に及ぼす影響

友人に対する親密性については、自他の関与度の類似性と相対的遂行度の観点から検討した。関与度の類似性については、男女とも自分にとって重要な領域において友人もその領域を重要であると感じているほど、友人に対する親密性は上昇することが示された。

相対的な遂行度については、男性で友人の関与度との交互作用効果が認められ、自分にとって重要な領域を友人も重要と感じている場合は、友人の遂行度が高いほど親密性は上昇するのに対し、友人が重要と感じていない場合には、友人の遂行度が高いほど親密性は低下することが示された。この結果は、自己評価維持に基づく Tesser, et al.(1984)の第1の予測や自己評価維持を拡張した Beach & Tesser(1995)の第3の予測とは大きく異なっており、第2の予測に近い。ただし、相手に対する親密性には、相手がその領域をどの程度重要と考えているかという相手の関与度も関わっているという点が、第2の予測とは異なっている。優れた他者に対する親密性は、相手もその領域を重要だと感じていることが必要であり、相手がその領域を重要と感じていない場合には、たとえ自分にとって重要な領域で優れていようともその相手に対する親密性は高まらないと考えられる。

では、同様の効果が女性で認められなかったのはなぜだろうか。まず考えられるのは、女性では友人に対する親密性が非常に高く、天井効果が生じていた可能性である(男性 $M = 5.69$, $SD = 1.00$; 女性 $M = 6.14$, $SD = 0.66$; $t(126.75) = 3.65$, $p < .001$)。また女性では友人選択の段階ですでに高関与領域でも優れた他者を選択されており、自分の方が優れている被験者が少なかったのかもしれない。この点はさらに検討する必要があるだろう。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. 1991 *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Thousand Oaks: SAGE Publications.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. Academic Press.
- Beach, S. R. H., & Tesser, A. 1995 Self-esteem and the extended self-evaluation maintenance model: The self in social contexts. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum Press. pp.145-170.

- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 233-247.
- 遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 39, 150-167.
- 井上正明・小林利宣 1985 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, 253-260.
- 磯崎三喜年 1994a 自己評価維持の視点からみた子どもの友人関係における自己と友人のとらえ方に関する比較文化論的考察 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 43, 227-236.
- 磯崎三喜年 1994b 児童・生徒の自己評価維持機制的発達の変化と抑うつとの関連について 心理学研究, 65, 130-137.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Pleban, R., & Tesser, A. 1981 The effects of relevance and quality of another's performance on interpersonal closeness. *Social Psychology Quarterly*, 44, 278-285.
- Suls, J. & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self. Vol.1* Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. pp.97-125.
- 高田利武 1999a 日常事態における社会的比較と文化的自己観—横断資料による発達の検討— 実験社会心理学研究, 39, 1-15.
- 高田利武 1999b 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, 47, 480-489.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

註

1)本研究を進めるにあたり、ご指導いただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科 吉田俊和先生、また英文の校閲をいただいた同研究科 高井次郎先生に感謝いたします。

The effects of similarity in self-defining dimensions and relative performance on friendship choice and intimacy.

Yasuhiko ISHIDA (*Faculty of Education, Aichi University of Education*)

The present study examined the effects of similarity in self-defining dimensions and relative performance on friendship choice and intimacy. Two-hundred and twenty-one undergraduates (84 males, 137 females) were asked to rate the amount of relevance (importance) of various activities for their self-definition, and their performance on each activity. They also rated the same items for a close friend, and a distant other, along with their intimacy with the close friend. The main results were as follows: (1) Participants perceived their close friend as more similar in self-defining dimensions. (2) They perceived their close friend's performance better than themselves on the low self-relevant dimension, and equally or better on the high self-relevant dimension. (3) With regard to intimacy, similarity in self-defining increased intimacy, but the effect of relative performance varied as a function of the close friend's relevance. When the close friend's relevance was high on high self-relevance, higher performance of the close friend increased intimacy, but when the close friend's relevance was low, their higher performance reduced intimacy.

Keywords: similarity in self-defining dimensions, relative performance, friendship choice, intimacy